

看護大学生の卒業前看護技術演習の効果

著者	佐々木 俊子, 武田 かおり, 阿部 準子, 大西 亜希子, 南山 祥子, 佐藤 郁恵
抄録	今年度初めて,卒業前の学生に看護技術に対する不安の軽減を図ることを目的とした看護技術演習を行った。演習項目は,「経口薬の与薬」「筋肉注射」「点滴静脈注射」「輸液ポンプ」「採血」「膀胱内留置カテーテル挿入」「聴診」「経管栄養」「気管内吸引」である。指導には,教員の他に卒業生インストラクターが参加した。演習の参加は自由であり,参加した学生には無記名自記式質問紙により演習前の不安の強さと看護技術到達度について,演習後に,不安の変化と看護技術到達度の調査を行った。その結果,演習後に看護技術到達度は上昇し,学生の看護技術に対する不安は軽減した。卒業前の看護技術演習は,学生の看護技術に対する不安の軽減に効果があることが明らかとなった。また,卒業生インストラクターの参加は,学生が臨床に触れる機会となり新人看護職員研修のイメージ化につながり,就職に対する不安を軽減する効果があると考えられた。 Health Crisis management duties relating to specific food preparation and distribution ...
雑誌名	紀要
巻	9
ページ	117-125
発行年	2015-03-31
出版者	名寄市立大学
ISSN	18817440
書誌レコードID	AA12272535
論文ID (NAID)	110009886965
URL	http://id.nii.ac.jp/1088/00001583/



看護大学生の卒業前看護技術演習の効果

佐々木俊子^{1)*}, 武田かおり²⁾, 阿部準子³⁾, 大西亜希子⁴⁾, 南山祥子¹⁾, 佐藤郁恵¹⁾

¹⁾名寄市立大学保健福祉学部看護学科, ²⁾北海道科学大学保健医療学部看護学科,

³⁾前名寄市立大学保健福祉学部看護学科, ⁴⁾名寄市立大学保健福祉学部看護学科非常勤講師

【要旨】今年度初めて、卒業前の学生に看護技術に対する不安の軽減を図ることを目的とした看護技術演習を行った。演習項目は、「経口薬の与薬」「筋肉注射」「点滴静脈注射」「輸液ポンプ」「採血」「膀胱内留置カテーテル挿入」「聴診」「経管栄養」「気管内吸引」である。指導には、教員の他に卒業生インストラクターが参加した。演習の参加は自由であり、参加した学生には無記名自記式質問紙により演習前の不安の強さと看護技術到達度について、演習後に、不安の変化と看護技術到達度の調査を行った。その結果、演習後に看護技術到達度は上昇し、学生の看護技術に対する不安は軽減した。卒業前の看護技術演習は、学生の看護技術に対する不安の軽減に効果があることが明らかとなった。また、卒業生インストラクターの参加は、学生が臨床に触れる機会となり新人看護職員研修のイメージ化につながり、就職に対する不安を軽減する効果があると考えられた。

キーワード: 卒業前, 不安, 看護技術, 卒業生インストラクター

I. はじめに

看護の質の向上, 医療安全の確保, 早期離職防止の観点から, 各病院・施設での新人看護職員研修は不可欠となっている。厚生労働省は, 平成 22 年 4 月「保健師助産師看護師法および看護師等の人材確保の促進に関する法律」の一部を改正し, 各病院・施設での新人看護職員に対する臨床研修を努力義務として位置づけた。さらに, 各病院・施設の研修体制の整備を目指し, 平成 23 年 2 月 14 日, 「新人看護職員研修に関する検討会報告書および新人看護職員研修ガイドライン」を公表している。

新人看護職員研修ガイドラインには看護技術到達度が示されており, 各病院・施設は就職後早期から看護技術の研修に取り組んでいる。

新人看護職員にとって看護技術は, 就職後のショック反応に影響する因子であり, 注射や検査介助などの診療補助の難しさ, 技術の応用ができないこと, 清拭など基本的な看護技術が上手くできないことなど「看護技術に関する苦痛」が報告されている(水田 2004)。

また, 基本的な看護技術に対する職務上の困難さ

は, 就職後 1 ヶ月の方が 3 ヶ月よりも強いと言われている。このことは, 看護基礎教育における看護技術は, 学内演習や臨地実習の中で限られているため, 注射や検査に伴う技術など経験していない看護技術を就職後すぐに求められても対応できず困難に感じていると示唆されている(唐澤ら 2008)。

A 大学においても看護技術は, 学内演習と臨地実習で習得するが, 倫理的な問題から制約があり, 患者の身体侵襲を伴う技術を学生が経験する機会は少ない。さらに, 臨地実習は 4 年生の前期に終了し, 後期は卒業論文の作成や国家試験に向けての学習に集中するため, 臨床や看護技術からは半年以上も離れた状態での就職となる。このような状況を考えると, 学生が就職した病院・施設で看護技術の研修を受ける時は, 離れていた臨床の中で緊張し, 経験のほとんどない技術に戸惑う状態になることが推測される。そこで, 看護技術に対する不安を軽減し卒業することができるように, 卒業前に看護技術演習を実施する必要があると考えた。

II. 研究の背景

稲垣ら(2004)は, 臨床実践への適応を目的に平成 13 年度より卒業前に看護技術の自己トレーニングを実施した。トレーニング項目は, 学生が実施できる自信が低く, 就職後すぐに必要な技術を選び「採血」「輸液準備」「輸液ポンプ操作」「創部消毒・ガーゼ交換」「膀胱留置カテーテル」の 5 項目とし

2014 年 11 月 28 日受付 : 2015 年 1 月 27 日受理

* 責任著者

住所 〒096-8641 北海道名寄市西 4 条北 8 丁目 1

E-mail : sasaki-toshi@nayoro.ac.jp

ていた。トレーニング前後における「実施できる自信」については、技術項目のすべてにおいて高くなり、トレーニングは「実施できる自信」を上昇させる効果があることが示された。また、トレーニング時期が就職直前であること学生が希望して参加するプログラムであることは、学生自身の技術に対する学習意欲が高まり、トレーニングによって学生自身が自らの技術不足を再認識するが練習すれば実施できるようになるという体験は、就職を控えた学生の不安を軽減し、今後の技術習得に対する積極性を促す効果があることを報告している。

山居ら（2006）は、卒業前看護技術トレーニングの効果について、実施直後と就職後1ヶ月にアンケート調査を行い検討している。トレーニング実施直後は、学生の満足度が高く不安解消に有効であること、就職後の看護技術に対する自信につながっていることが報告されている。

永野ら（2013）は、就職に先がけて学生が看護技術に自信をもって臨めることを目的として、平成19年度から卒業前技術強化プログラムを実施している。事前調査で、就職にあたり看護技術に不安があると答えた学生は83.2%であり、不安の内容は「注射や採血など患者への侵襲が強い技術」「体位変換や移送などの生活援助技術」であった。指導者は、学生の8~9割が関連病院に就職することをふまえて、関連病院の看護師が担当していた。卒業前技術強化プログラムの効果として、学生は就職後のイメージが付き不安が軽減し、就職までの準備に前向きに取り組もうという気持ちをもつことができたこと、指導にあたった臨床の看護師からは、学内の学習状況や使用している物品、学生の技術の実施状況などを理解することができ、実習指導や入職後の対応に活かすことができると肯定的な意見が多く見られたことが挙げられていた。

以上の先行研究から、卒業前の看護技術演習は、学生の看護技術に対する不安の軽減に有効であり、就職後の看護技術を実施する自信にも影響していると考えられる。よって、卒業前に看護技術演習を実施し、看護技術に対する不安を軽減する支援が必要であると考えられる。

看護技術の演習項目については、今年度卒業予定の学生に不安を感じている看護技術についてアンケートを実施した。その結果、「点滴静脈注射（準備・固定）」「採血」「ヘパリンロック」「輸液ポンプ」「輸血」「導尿・留置カテーテル」「筋肉注射」「口・

鼻吸引」「心電図モニター操作とモニタリング」「皮下注射」「経管栄養法」「酸素マスクと酸素ポンベの取り扱い」「無菌操作・ガーゼ交換」などが挙げられた。学生は、患者への身体的侵襲が伴うあるいは器械等の操作が必要な看護技術について、練習の必要性を感じ不安をもっていることが窺えた。この結果と先行研究を参考に、「経口薬の与薬」「筋肉注射」「点滴静脈注射」「輸液ポンプ」「採血」「膀胱内留置カテーテル挿入」「聴診」「経管栄養」「気管内吸引」の9項目を選定した。

演習の時期・期間については、学生の技術に対する学習意欲が高まるとされる就職直前であること、学生が希望して参加し、希望する演習項目が体験できる時間があることを考慮した。

また、指導体制として、柏倉ら（2013）は、卒業生インストラクターによる演習指導が教員から行われるよりも、学生の緊張の軽減や親しみやすさを感じることで指導効果が得られると報告している。そこで、今回の演習では本学の卒業生をインストラクターとして招聘し指導効果が高まることを期待した。

III. 目的

本研究の目的は、卒業前に看護技術演習を実施し、看護技術演習の前後で、参加学生の看護技術に対する自己評価の変化と不安の変化から演習の効果を明らかにすることである。同時に、卒業生インストラクターの効果について検討する。

IV. 研究方法

1. 調査期間

平成26年2月26日～3月31日

2. 調査対象

- ①平成26年3月に卒業予定であり、看護職員として就職する学生のうち演習に参加したA大学学生38名であった。
- ②卒業生インストラクター（病院で看護師として働いているA大学卒業生）9名であった。

3. 調査方法

調査は、無記名自記式質問紙法で行った。

- ①学生には、質問紙による調査を演習前と演習後の2回実施した。事前に文書と口頭で調査について説明した。なお、演習前用と演習後用の質問紙には予

め同じシリアル番号を付与し同一人物の回答であることが、確認できるようにした。このことについても事前に説明を行い演習前用と演習後用の質問紙と一緒に配付した。質問紙の回答や提出は任意とし、演習前の質問紙は演習開始前に所定の場所に投函箱を設け回収し、演習後の質問紙は演習最終日に実習室出口付近に投函箱を設け回収した。

②卒業生インストラクターには、演習後に質問紙による調査を実施した。演習前に口頭で調査について説明し、質問紙を配付した。質問紙の回答や提出は任意とし、控室付近に投函箱を設け回収した。

4. 調査内容

①学生に対する質問項目は、演習前に、経口薬の与薬、筋肉注射などに関する看護技術到達度 29 項目について、評定は「できる：4 点」から「できない：1 点」の 4 段階評定とした。演習前の看護技術に対する不安の強さについて「なし：0」から「強い：5」の 6 段階から最も近い数値の選択とした。

演習後の質問項目は、参加した技術項目の選出、卒業前看護技術演習の企画（開催時期、開催期間、卒業生インストラクターの参加や意見交換会）について自由記述とし、演習後の看護技術到達度 29 項目（演習前と同様の内容）とした。演習後の看護技術に対する不安の変化は、変化した程度を「減少：-3~-1、変化なし：0、増強：1~3」の 7 段階から最も近い数値の選択とした。

②卒業生インストラクターに対する質問項目は担当した技術項目、学生の印象、指導の効果、演習の内容・方法について、学生との意見交換会について自由記述とした。

5. 分析方法

各技術の評価項目、不安の強さと不安の変化について、記述統計量の算出を行った。演習前後共に回答のあったデータは Wilcoxon の符号付順位検定を行った。有意水準は $P<.05$ を採用した。演習に対する感想や要望の自由記述については、類似の内容を整理した。なお、分析には統計ソフト SPSS 21.0J を用いた。

6. 倫理的配慮

研究参加者に対して、①質問紙調査の参加は自由意思によるものであり、研究協力の諾否が成績に一切影響しないこと、②質問紙調査は、無記名で個人が特定されないように配慮すること、③回収した質問紙やデータは、研究担当者が鍵付きのロッカーに保管し厳重に管理すること、④得られた結果は看護

教育に関する学会ならびに誌上で公表すること、また公表の際には、研究参加者のプライバシーの保護に万全を尽くし、個人を特定できないようにデータ保管し厳重に管理すること、⑤回答した質問紙の提出によって調査の協力に同意したとみなすことを書面および口頭で説明をした。本研究は、名寄市立大学の倫理審査を受け承認を得て実施した。

V. 卒業前看護技術演習の概要

演習の時間配分およびスケジュールは教員（研究者）が調整するが、参加する看護技術の演習項目は学生が自由に選択した。

1. 演習実施日

演習は、平成 26 年 3 月 5 日～7 日の 3 日間で演習スケジュールに沿って実施した（表 1）。

2. 技術項目

演習する看護技術項目は、先行研究（稲垣ら 2004；山居ら 2006；永野ら 2013）と学生が不安に感じている看護技術についてのアンケート結果を参考に、「経口薬の与薬」「筋肉注射」「点滴静脈注射」「輸液ポンプ」「採血」「膀胱内留置カテーテル挿入」「聴診」「経管栄養」「気管内吸引」の 9 項目を選定した。トレーニングには、シミュレータと臨床現場で用いている衛生消耗品等を準備した。

3. 指導体制

厚生労働省「新人看護職員技術指導ガイドライン」

表 1 卒業前看護技術演習スケジュール

3月5日	
時刻	内容
13:00~15:00	技術演習（教員が指導） ・演習項目を学生が選択して回る。 ・1パターン 60 分で交代する。
3月6日	
時刻	内容
9:00~12:00	技術演習（教員が指導） ・演習項目を学生が選択して回る。 ・1パターン 60 分で交代する。
11:30~13:30	*昼休みは交代でとる
13:00~17:00	午前と同様
3月7日	
時刻	内容
9:00~	卒業生インストラクターと打合せ
10:00~	技術演習（卒業生が指導） ・卒業生 1 名に学生 2~3 名を担当する。 ・1パターン 60 分で交代する。
12:00~13:30	昼休み
13:30~14:30	午前と同様
15:00~	学生と卒業生の意見交換会

を参考に、技術ガイドラインを作成し指導内容の統一を図った。事前に参加を希望している学生には、技術ガイドラインを配付し学習を促した。

3日間の演習期間の中で1日目と2日目は、参加する学生を2~3名のグループに編成した。演習は、1項目60分で交代とした。教員は、看護技術1~2項目毎に1名を配置し、学生の質問に応じたり、物品の使用方法を紹介したり、必要時デモンストレーションを行い指導した。3日目は、「注射指示のある患者」「採血指示のある患者」の2事例を想定した内容で演習を実施した。指導には、A大学卒業生がインストラクターとして参加した。学生2~3名のグループに1名の卒業生インストラクターが指導にあたった。演習に入る前に、卒業生インストラクターと教員で当日のスケジュール確認や学生に配付している技術ガイドラインを基に打ち合わせを行い指導内容の統一を図った。

看護技術演習後には、卒業生インストラクターと参加学生との意見交換を1時間程度設けた。

VI. 結果

1. 参加者の概要

①参加学生数38名、一日あたりの演習参加の人数は32~33名であった。質問紙の回答は33名(回収率86.8%)から得られた。回答に一部欠損のあるものは有効回答とし、33名を分析対象とした。看護技術到達度については、演習前後の両方に回答が得られた21名を分析対象とした。

②卒業生インストラクターは9名、質問紙の回答は9名(回収率100%)から得られた。就業年数は、1年目2名、2年目5名、3年目2名であった。就業している医療機関は、大学病院2名、国公立病院4名、私立病院3名であった。所属する診療科は、内科3名、外科2名、救急外来1名、精神科1名、小児科2名であった。

2. 卒業前看護技術演習の企画内容について(表2)

①参加した演習項目は、採血24名(72.7%)が一番多く、続いて点滴静脈内注射22名(66.7%)、輸液ポンプ21名(63.6%)、参加人数が少ない演習項目は、聴診5名(15.2%)、経口薬の与薬8名(24.2%)であった。自由記述では、「針を使う技術は、恐怖心があるので演習できて良かった。経口薬の項目はあまり必要性を感じなかったが、薬のチェック方法がわかり参加して良かった。演習に出なかったらわ

表2 卒業前看護技術演習の企画内容

学生が参加した技術演習 (複数回答)	人数	%
経口薬の与薬	8	24.2
筋肉注射	13	39.4
点滴静脈内注射	22	66.7
輸液ポンプ	21	63.6
採血	24	72.7
膀胱留置カテーテル	13	39.4
聴診 (呼吸器・腸蠕動音)	5	15.2
経管栄養	12	36.4
吸引	12	36.4
注射指示のある患者	19	57.6
採血指示のある患者	18	54.5

開催時期・期間、卒業生の参加・意見交換会

		人数	%
開催時期	ちょうど良い	23	69.7
	早い	1	3.0
	無回答	9	27.3
開催期間 (3日間)	ちょうど良い	23	69.7
	少ない	1	3.0
	無回答	9	27.3
卒業生の参加	とても役立った	18	54.5
	役立った	2	6.0
	無回答	13	39.3
卒業生との意見交換会	とても役立った	15	45.4
	役立った	2	6.0
	無回答	16	48.4

からないことだらけだった。」という内容であった。

②開催時期は、参加した60%以上の学生が、「ちょうど良い時期」と答えていた。自由記述では、「国家試験、卒業研究の報告会が終わって卒業まで少し時間がある時期で、就職のことを意識して参加できた。臨床のイメージをもつことができた。引越など忙しくなる前で良かった。」という内容であった。

③開催期間は、参加した60%以上の学生が、「ちょうど良い」と答えていた。自由記述では、「自分で希望する演習は全て実施できた。一日で詰め込むより復習しながら翌日に臨めた。長くても疲れる。技術習得までには至らなかった。」という内容であった。

④卒業生インストラクターの参加は、「とても役立った」54.5%、「役立った」6.0%であった。自由記

述では、「先輩の生の声は実際にイメージしやすく、モチベーションが上がる。自分たちと近い立場の人からの指導は(失敗談など聞けて)臨場感があった。就職してプリセプターに教わるイメージができた。」という内容であった。

⑤卒業生との意見交換会は「とても役立った」45.4%、「役立った」6.0%であった。自由記述では、「普段聞くことができない、新人看護師の1日、休日の過ごし方や看護のやりがいなど具体的な話が多く、4月からのイメージをもつことができ不安が解消された。看護師の先輩がカッコ良く自分もそうなりたと思った。」という内容であった。

3. 看護技術の不安と看護技術到達度の変化

①演習前の看護技術に対する不安の強さは、不安が強い「5」が14名(42.4%)、「4」が7名(21.2%)であり、60%以上の学生が不安を強く示していた。演習後の看護技術に対する不安の変化は、「-3」1名(3%)、「-2」11名(33.3%)、「-1」7名(21.2%)であり、不安が減少したのは参加した学生の57.5%だった。変化なしと「1」不安が増強したのはそれぞれ1名(3%)であった(表3)。

②看護技術到達度の演習前と演習後の比較について(表4)、看護技術到達度が演習後に有意に上昇した項目は、「経口薬の与薬」は3つの評価項目の中で、<6Rと三度の確認>(P<0.01)と<与薬後の実施記録への記載>(P<0.05)であった。「筋肉注射」は3つの評価項目の中で、<アンプルの吸い上げ>(P<0.05)と<適切な部位を選定し筋肉へ穿刺>(P<0.05)の項目であった。「点滴静脈注射」は、4つの評価項目すべてが有意に上昇していた(P<0.001)。「輸液ポンプ」は4つの評価項目すべてが有意に上昇していた(P<0.01)。「採血」は、4つの評価項目すべてが有意に上昇していた(P<0.01)。「膀胱留置カテーテル」は、3つの評価

項目の中で、<経管栄養の挿入>の項目が有意に上昇していた(P<0.05)。「経管栄養」は、3つの評価項目の中で、<口・鼻からの挿入>(P<0.01)と<気管への挿入確認>(P<0.05)の項目が有意に上昇していた。3つの評価項目の中で、「聴診」は2つの評価項目で、「聴診部位と順序」は2つの項目も到達度は下降傾向であった。

演習後 不安の変化 人数 (%)

4. 卒業生インストラクターの感想

①卒業生インストラクターのうち3名は『注射指示のある患者』の事例を担当し、4名は『採血指示のある患者』の事例を担当した。また、27名の両方の事例の看護技術を担当した。11(33.3%)の学生は「真剣に学ぼうとする姿勢が見えた。意欲が伝わった。4月が36歳近くことにすごく不安があるのだと感じた。」と、学生の真剣さに接し、改めて新人の不安な気持ちに気づいたという内容であった。

③指導の効果については、「ガイドラインの内容だけではなく、実際の現場でのテクニックを伝えるとすぐに取り入れていた。一緒に“できた”と感ずることができたのでプラスになっている。」と、自分たちの指導に手ごたえを感じている内容であった。

④技術演習の企画内容については、「特に必要とされる内容だと思う。採血を就職前に経験できて自信につながると思う。事前に練習しているので、復習になっていて指導しやすかった。」であり、今回の企画内容については概ね良かったという感想であった。

表 4 看護技術到達度の演習前後の比較

n=21

看護技術	項目	演習前	演習後
1.経口薬の与薬	①指示箋による薬剤の確認	3.0 (0-4)	3.0 (0-4)
	②6 R と三度の確認	2.0 (0-4)	3.0 (0-4) **
	③与薬後の実施記録への記載	2.0 (0-3)	2.0 (0-4) *
2.筋肉注射	①アンプルの吸い上げ	2.0 (1-3)	3.0 (0-4) *
	②適切な注射針の確認	2.0 (1-3)	3.0 (0-3)
	③適切な部位を選定し筋肉へ穿刺	2.0 (0-3)	3.0 (0-4) *
3.点滴静脈注射	①必要物品の準備	2.0 (0-4)	3.0 (0-4) ***
	②静脈への穿刺	2.0 (0-2)	3.0 (0-4) ***
	③静脈への穿刺針を挿入後、点滴チューブとの接続	1.0 (0-3)	3.0 (0-4) ***
	④点滴チューブを固定	1.0 (0-3)	3.0 (0-4) ***
4.輸液ポンプ	①指示箋による薬剤を調合 (バイアルと溶解液)	1.0 (0-3)	3.0 (0-4) ***
	②輸液ボトルに輸液セットを接続しルートに薬液を満たす	2.0 (0-4)	3.0 (0-4) ***
	③輸液チューブをポンプにセットし作動する	2.0 (0-3)	3.0 (0-4) **
	④薬液を注入後、へパ生でルートをロックする	1.0 (0-3)	3.0 (0-3) ***
5.採血	①採血部位の選定	2.0 (0-4)	3.0 (2-4) **
	②駆血帯の装着	3.0 (0-4)	3.0 (3-4) **
	③静脈への穿刺	2.0 (0-3)	3.0 (1-4) ***
	④抜針後の止血	2.0 (0-4)	3.0 (2-4) **
6.膀胱留置 カテーテル	①清潔操作による取扱い	2.0 (0-3)	3.0 (0-4)
	②尿道へのカテーテル挿入	2.0 (0-3)	2.0 (0-4) *
	③カテーテルの固定	2.0 (0-4)	3.0 (0-4)
7.聴診	①呼吸器の聴診部位と順序	3.0 (2-4)	3.0 (0-3)
	②腸蠕動音の聴診部位と順序	3.0 (2-4)	3.0 (0-4)
8.経管栄養	①口・鼻からの挿入	1.0 (0-2)	3.0 (0-3) *
	②胃部への挿入確認	2.0 (0-4)	2.0 (0-4)
	③チューブの固定	1.0 (0-4)	3.0 (0-4)
9.吸引	①口・鼻からの吸引	2.0 (0-3)	2.0 (0-3) **
	②気管への挿入確認	2.0 (0-3)	2.0 (0-3) *
	③吸引圧の調整	2.0 (0-3)	2.5 (0-4)

Wilcoxon の符号付順位検定 * $P<0.05$ ** $P<0.01$ *** $P<0.001$

表中の数値は中央値 (最小値-最大値)

⑤学生との意見交換会については、「今の時期に悩んでいることがわかった。一年前の自分を思い出した。春から入職してくる新人のイメージがついた。教える立場になって伝え方や距離感の難しさを感じた。」など学生との関わりが、職場で関わる新人のイメージに繋がっていた。

VII. 考察

1. 卒業前看護技術演習の効果

開催時期、開催期間については60%以上の学生が、今回の時期、期間で「ちょうど良い」と答えている。3月の演習は、就職を意識して看護技術を習得しようという意欲も高まっている時期であり効果的であったと考える。また、3日間のなかで学生は、実施したい看護技術を選出し繰り返し練習している姿から演習に集中できる期間としても適切だったと考える。

看護技術に対する不安は、演習に参加した学生の60%以上で強く現れていたが、演習後は約60%の学生の不安が減少していた。稲垣ら(2004)は、実習中に経験できなかった項目でも教室で模擬体験することで「実施できる自信」を上昇させる効果があると報告しており、卒業前に看護技術演習を行うことで、実施できる自信を高め、不安を減少させる効果に繋がったと考える。

看護技術到達度からみても、「経口薬の与薬」「筋肉注射」「点滴静脈注射」「輸液ポンプ」「採血」「膀胱内留置カテーテル挿入」「経管栄養」「気管内吸引」は、演習後に平均値の上昇があり実習では経験することが少ない看護技術について演習の効果があつたと考えられる。

演習後に看護技術到達度が下がった「聴診」は、実習中何度も経験することができた技術である。実習での経験から「できる」ととらえていたが、実習

終了から時間が経ち忘れていた点が多かったため下がったと考える。平野ら(1997)は、看護技術の習熟は繰り返し練習することにより習熟できている。看護技術は練習を繰り返さなければ定着しないということであり、「できる」と思っていた技術の再確認の意味においても、卒業前の看護技術演習の意義があったと考える。

演習に参加した学生の60%~70%は、「採血」「点滴静脈内注射」「輸液ポンプ」の演習を実施している。一方、他の演習項目は、15%~30%程度の学生の参加に留まっている。このことは、学生は、針を使う、器械を使う技術は、患者への侵襲やインシデントの危険性が大きいと感じている。しかし、経口薬の取り扱いや膀胱留置カテーテル、経管栄養、吸引は、練習の必要がないと捉え、身体への侵襲や危険性のイメージが理解できていないことが考えられる。「経口薬の与薬」に参加した学生からは、「演習を行う前は必要性を感じていなかったが参加して良かった、演習に参加しなければわからないことだらけだった。」と、演習の効果を実感している意見があり、参加者が少なかった演習項目には、学生が練習の重要性を感じて参加できるように工夫する必要があると考える。

2. 卒業生インストラクターの役割

学生は、卒業生インストラクターの指導や意見交換会を通して、卒業生インストラクターを身近な存在としてとらえ、就職先の病院をイメージしていた。意見交換会においては、普段聞けない看護師としての生活や休日の過ごし方など参考になる話を聞き、就職に対する不安が解消され楽しみとしてとらえている学生もいた。学生は、卒業生インストラクターの親身な指導や卒業生同志の交流している姿に自分の成長を期待し、職場への意識が高まったと考える。

卒業生インストラクターは、学生の真剣に学ぼうとする姿勢や緊張感を受けて、学生が“できた”と感ずることができるように戸惑っているところに声をかけ指導していた。演習項目については、「採血」を就職前に経験できて自信につながるという意見があり、注射関連技術は学生の要望も多く、経験を活かした指導ができる項目であったと考える。また、卒業生インストラクターは、卒業前の学生と関わり、1年前の自分の姿を重ね成長した自分を感じていたり、指導の伝わらなさに課題を感じていたり、学生の悩みを聞きプリセプターとしてのイメー

ジにつなげていた。山本ら(2013)は、卒業生インストラクターの評価として、自己研磨の認識の強化と役割遂行がもたらしたリフレッシュ効果などがあることを報告している。

今回の卒業前看護技術演習は、卒業生インストラクターには母校に戻り後輩を指導することで、できる自分とまだできていない自分を見つめ更なる自己研磨の目標が明らかになったり、仲間との再会でお互いの成長を観たり近況の話をしたり、自己評価や新たな目標設定の機会となる可能性があることが示唆された。

また卒業生インストラクターは、学生に臨床現場での看護技術や就職時の研修のイメージを想起させ、学生の意識が大学生から新人看護職員となっていくことへの橋渡し役となる存在であると示唆された。

VIII. 結論

今年度初めて、卒業前看護技術演習を行った。実施した演習の効果について以下の結論が示された。

- ①卒業前の学生は、実習で経験の少ない看護技術について強く不安をもっていたが、演習をすることで看護技術到達度は上がり不安の軽減につながった。
- ②卒業前の学生は、卒業生インストラクターの指導から臨床の新人看護職員研修をイメージすることができ就職への不安を軽減していたと考えられる。
- ③卒業前看護技術演習は、卒業生インストラクターの自己評価や新たな目標設定の機会となる可能性が示唆された。

IX. 本研究の限界と今後の課題

本研究では、卒業前の看護技術演習の効果について、演習前後の看護技術に対する不安の変化と看護技術の到達度の変化および自由記述の内容から検討した。学生の不安について具体的な内容は捉えていないため、看護技術到達度と不安の解消度合が一致しているかが分からない部分がある。今後は、看護技術に対する具体的な不安の内容と看護技術到達度および不安解消に影響する要因を明らかにすることが必要であると考えられる。

謝辞

本研究に参加していただきました学生の皆さま、卒業生インストラクターの皆さまに感謝いたします。

文 献

- 稲垣美紀, 土居洋子, 西上あゆみ (2004) 卒業直前の看護学部学生の看護技術自己トレーニング効果. 大阪府立看護大学紀要 **10**:23-29.
- 柏倉大作, 田中広美, 山本真由美, 工藤京子, 大野夏代, 神島滋子, 多賀昌江, 松浦和代 (2013) 卒業生インストラクターを活用した卒業前スキルアップトレーニングの参加状況と評価. 第 33 回日本看護科学学会:616.
- 唐澤由美子, 中村恵, 原田慶子, 太田規子, 大脇百合子, 千葉真弓 (2008) 就職後 1 ヶ月と 3 ヶ月に新人看護師が感じる職務上の困難と欲しい支援. 長野県看護大学紀要 **10**:79-87.
- 厚生労働省 (2011) 新人看護職員研修ガイドライン, <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2009/12/dl/s1225-24a.pdf>. (2013 年 2 月 11 日)
- 永野光子, 田中朋子, 樋口キエ子, 工藤綾子, 青柳優子, 小谷野康子, 杉山智子, 西田みゆき, 原田静香, 岡田隆夫 (2013) 平成 23 年度卒業前技術強化プログラムの評価と課題. 順天堂大学医療看護学部医療看護研究 **9**:59-63.

- 平野千穂子, 岡本美佐江, 金子代理子, 伊吹はまよ, 大橋五輪子, 松江克美, 村上美智子, 塩田節子, 山岡和子 (1997) 看護基礎教育における技術教育の位置づけ<教育の場における技術向上を目指した試み>グループ演習を取り入れた看護技術習得方法の検討. 看護展望 **22**: 1456-1460.
- 水田真由美 (2004) 新卒看護師の職場適応に関する研究ーリアリティショックと回復に影響する要因ー. 日本看護研究学会雑誌 **27**:91-99.
- 山居輝美, 登喜和江, 坂本雅代, 前川泰子, 今戸美奈子, 土居洋子 (2006) 卒業前看護技術トレーニングの効果ー実施直後と就職後 1 ヶ月のアンケート調査よりー. 大阪府立大学看護学部紀要 **12**:11-22.
- 山本真由美, 田中広美, 工藤京子, 柏倉大作, 大野夏代, 神島滋子, 多賀昌江, 松浦和代 (2013) 卒業前スキルアップトレーニングに参加した卒業生インストラクターの実態と評価. 第 33 回日本看護科学学会:617.

Research report

The Effects of Nursing Technique Training before Graduation for Students of the College of Nursing

Toshiko SASAKI^{1),*}, Kaori TAKEDA²⁾, Junko ABE³⁾, Akiko ONISHI⁴⁾,
Shoko MINAMIYAMA¹⁾, Ikue SATO¹⁾

¹⁾ Department of Nursing, Faculty of Health and Welfare Science, Nayoro City University,

²⁾ Department of Nursing, Faculty of Health Science, Hokkaido University of Science,

³⁾ Before Nayoro City University, Health and Welfare Department of Nursing,

⁴⁾ Nayoro City University of Health and Welfare Department of Nursing Part-time lecturer

Abstract: Pre-graduation nursing technique training was conducted for students of the College of Nursing this year for the first time ever with the purpose of alleviating students' anxieties over nursing technique. The training was composed of "oral medication", "intramuscular injection", "intravenous drip infusion", "infusion pump", "drawing blood", "insertion of indwelling catheter in bladder", "auscultation", "tubal feeding" and "intratracheal suctioning." Teachers and graduate instructors participated in the training as instructor. Participation in the training was voluntary. An anonymous self-administered questionnaire was conducted for the students who participated in the training regarding the severity of their anxiety and their degree of technique achievement before the training was conducted. After the training, changes in their levels of anxiety and the extent of their technique achievement were investigated. As a result, it was revealed that their achievement in nursing techniques rose and their anxiety over nursing techniques was alleviated by the training. It was clarified that pre-graduation training is effective at alleviating students' anxieties over nursing technique. Participation by graduates created an opportunity for students to be exposed to real hands on clinical experience, leading to the imaging of the workshop for fresh nurses. It was considered effective at alleviating anxiety about employment.

Key words: pre-graduation, anxiety, nursing technique and graduate instructor

Received November 28, 2014; Accepted January 27, 2015

*Corresponding author (E-mail: sasaki-toshi@nayoro.ac.jp)